

## 外地地質へのアフターサービス

小林 貞 一 (地質・名誉教授)

学部消息といってもこれは本学地質学科にまつわる戦後30年間の一挿話である。戦前に朝鮮や満洲などで調査・研究をした東亜地質の成果を取りまとめて、これを公とするという大仕事は、終戦後の間のないころから話題になって、30年たったこの程漸く有終の美をなすことが出来た。そしてこの労作に対して東大の地質学関係の教授連が少なからぬ努力をして来たのである。

外地から帰還してきた同学の士は物的には無一物であったかも知れないが、未発表の貴重なデータを持っている人が少なかった。当時は全国民にとって最も苛酷な時期ではあったが、それでも外地での業績を収録してこれを公表したいという熱意が我々の間からうつつとして起って来た。関係者は四散しその連絡をとるのは容易ではなかったが、しかし昭和23年には発起人会を開くことが出来た。そしてその後2年を経て漸く東京地学協会内に東亜地質産誌編集委員会が誕生した。この頃東京には米国地質調査所(USGS)の出張所があり、東アジアの地質関係資料の蒐集を主要な業務としていた。我々の計画はまさにこの線に合致していたので、同所から協力と物的援助の手を差し延ばして呉れた。また昭和26年度には若干の文部省刊行助成金も受けた。しかしその外には寄附金を募らずによくここまでやれたものだと不思議に思う位である。

それには何といっても関係者各位の並々ならぬ熱意と努力があったからである。その賜物として早くも昭和27年4月には東亜地質産誌 3巻 1991頁の大作が出版された。そのうちには当時の日本地質学者の5分の1以上に当る200名余が寄せた260篇が収録されていたのである。それらは朝鮮・満洲・華北・華中華南・台湾の地質産産などに関係するものであるが、その約5割は満鮮関係であった。

東京地学協会では大正末に既に南北支那地質図2幅を編集出版しているが、その後東亜地質図や南洋地質図などを発行して来た。今回は新しいデータを基にしてUSGSの協力を得てGeological Map of the Far Eastを編集することになった。この作業ではUSGSの東京出張所に勤めていた矢部茂らの労作が特に多大であった。8年間の歳月を費して、昭

和35年に朝鮮満洲に華北北東部を含む地域の地質図127図幅を完成した。

これらの地質産誌(邦文)や地質図を多量にUSGSから貰い受けることが出来たので、それらの一部を寄贈、他を販売した。そしてその収益で、委員会発足当初からの悲願であったGeology and Mineral Resources of the Far East, 3 Volumes, 1385 pagesを東大出版会から出し終ったのが、昭和46年10月であった。この大作には34著者の54論文が集録されている。

それからまた4年して遂に収支決算が出来ることになった。そこで手元の英文の東亜地質産誌391冊は、我々の知識を広く江湖の利用に供したいという本来の主旨に基いて、今春海外の86ヶ国、274機関へ寄贈することになり、去る4月に発送された。そして残金は協会に寄附して委員会はもとの無一物となり、本年7月にめでたく目的を貫徹して解散した。10月末までに世界各地の寄贈先から、その約半数の135通の礼状が来ている。私はこの企の発端から終末まで見る事が出来てよろこんでいる。

関係者の数と刊行物の量というその規模から見てもこの成果は日本の地質学者が外地へ寄せた貢献中の特筆すべきものであることは疑ない。この大事業の遂行に当って、東大理学部地質学教室では立岩・坂本両教授と共に私もこの委員会の委員をつとめ、坂本教授は委員会後半の幹事であった。立岩教授は朝鮮の部で、坂本教授は満洲と華北の部で、自著以外に多くの時間を費した。私は南鮮と北鮮・南満と中北満およびその近隣との地質構造発達史、そして台湾と日本列島との地質関係についての4論を英文地質産誌に載せた。渡辺・久野・高井・岩井・岩生・立見らの諸教授も邦文や英文の同誌に寄稿した。それのみならず工学部の三土・今井両教授や教養部の市村教授もこの企に参加した。月日のたつのは早いもので今日では立見教授だけが現職に停っている。我々は退職後も他の委員と共に時々赤門横の学士会館や弥生門横の東大出版会など委員会を開いた。現在は坪井誠太郎名誉教授が地学協会の会長である。本委員会の委員長の小倉勉元山形大学学長は大正2年、委員会前半の幹事で華中・華南の部の編集に当ら

れた植村癸巳男氏は大正7年の本学地質学科の卒業であった。今は市村・植村・久野ら三氏がすでに物故されて感激無量である。

因みに東京地学協会はイギリスのRoyal Geographic Society を範として明治12年に北白川能久親王を社長（会長のこと）として設立した。日本の学協会中では由緒のある会である。その発起人の渡辺洪基は明治19年に総理を総長と改めた時の最初の総長であった。このプロジェクトは本学と協会とにいろいろの点でつながっていたのである。

言うまでもなく日本は大和時代に仏教と共に渡来した大陸の文化から多くの恩恵を蒙ったのである。

我々が大陸に残した東亜地質上の足跡も亦、将来の地学への不滅の礎石として役立つことであろう。韓国や台湾では戦前の知識を基礎として着々と戦後の発展がなされてきたことがよく判っている。中国本土には1956・58年に出版された中国地質編輯委員会・中国科学院地質研究所編の中国区域地層表とその補篇や1964年に全国地層委員会が出した全（中）国地層会議学術報告集編12冊などの総括的大著があるが、その参考文献を通覧すると、前者では特に中国東北や華北の地域で、また後者では種々の地質時代について既に日本の論文が多数に引用されていて、我々にとってまことに欣快である。